内閣総理大臣賞（最優秀賞）

田んぼの水に思いをはせる

東京都

新宿区立西早稲田中学校 にしわせだ 二年

秋永 あきなが 橘香 きつか

「水」といって私が一番最初に思いつくのは田んぼの水だ。まだ、幼稚園生だった頃、東京から田んぼや畑が多い地域に引っ越した。ここでは、父に連れられて何度も田植えに行った。田植えの仕方は農家のおじさん達が教えてくれた。水路や堰を管理する土地改良区という組織のおじさんだ。

田植えが終わると、生き物採集が待っていた。毎週毎週、長靴と着替えを持って出かけて行った。おじさん達、地域の小学生と夢中になって、たも網で田んぼや水路をすくった。一緒に水路をすくった小学生とは不思議とすぐに仲良くなれた。捕った生き物を大きな桶に集めた。メダカ、ドジョウ、タモロコ、ギンブナ、スジエビ、水棲昆虫、桶に入りきらない大きなコイ、ナマズが捕れることもあった。私は、すっかり田んぼの生き物が好きになり、自分用のたも網、水槽を揃え、家族で生き物を探しに行くようになった。

稲刈りも終わり、冬が訪れた。少し寂しいと思いつながら田んぼを見に行った。田んぼに水はなく、稲の切り株が寂しそうに残っていた。小鳥のさえずりがかすかに聞こえたが、生き物の気配は消え、静まり返っていた。

ドジョウが隠れているかもしれないと思い、水路の小さな水たまりを、たも網ですくってみた。ワア、思わず声をあげてしまった。網の中に、わずか二、三匹の小さな鮒が三匹、ピチピチと跳ねていたからだ。小さな水たまりに身を寄せ、春を待っていたのだ。こんなに小さくても、一生懸命に生きている。そう思い、慌てて私は小鮒を水路に返した。小さな水たまりが小鮒の命をつないでいたのだ。私もまだ小さかったが、水が命を支えていることを強く感じた。

小学校二年生の時、再び東京に住むことになった。田んぼや水路からは遠く離れたが、そこでの楽しい記憶は鮮明に残っている。

田んぼの水に思いをはせ、人と水について考えてみた。一枚一枚の田んぼを潤す水は、日本人の命を育むお米を育てている。張り巡らされた水路は血管、田んぼをめぐる水は、まるで血液の様だ。人間の体では血液に肺が酸素を供給、肝臓が有害物質を分解、腎臓が老廃物を除去している。この他、心臓、胃や腸、多くの内臓が各々の役割を果たし、命を支えており、どれかが停滞すれば、病気になってしまう。

水も血液と同じだ。汚れたり、不足すれば、人間は生きていけない。田んぼの水も、雨水を蓄える森林、川、ダム、堰、水路、田んぼ、これらが、多くの人々の絶え間ない努力によって守られ、しっかりと役割を果たしているからこそ守られているのだ。

田んぼや水路について、知りたくなり、インターネットで調べてみた。血管のように張り巡らされた水路の長さは、四十万km、地球10周分に相当する。優しくしてくれた土地改良区や農家のおじさん達が昔から大切に守り続けてきたものだど知り、とても驚いた。

更に調べると、田んぼや水路は、お米を作る以外にも、とても貴重な役割を果たしていることが分かった。雨水を貯めて洪水を防ぐ、土砂崩れを防ぐ、川の流れを安定させる、地下水になる、水を浄化する、気温の上昇を緩和する、生物多様性を保全する、癒しや安らぎをもたらす。この多面的な機能が東京に住む私たちを含むすべての人々の生活を支えている。

田んぼの水はお米の中に蓄えられ、それを食べた人に吸収され、体で作られる。私達が安心して健康に過ごすためには、田んぼや水を守り続けなければならないと強く思った。

水のために私ができることには限界があるが、水を無駄にしない、油や汚い水を流さない、お米や野菜をおいしく食べる。最後に、田んぼや水を守る人達への感謝の心を大人になるまで持ち続けることを決意した。